

季節感を測る

渡辺 隆一*

Ryuiichi WATANABE

近年、季節感がうすれた、なくなったと言われる。あわたましい都会的な生活の中で失なわれたものは、我々に季節を感じさせてくれるもの、例えば、早春のフクジュソウ、カエル合戦、初夏のツバメ、卯の花、秋のスキに虫の音、といった具体的な生き物ばかりではなかったのである。そうしたもの達によって触発され、研ぎすまされてきた我々の自然環境への認識、関心といったもの、わけても個別の利害の上にはなく、万人の共感しうるものとしての季節感が失われてきたのである。その反動でもあろうか、ニュース番組の冒頭にちょっとした季節感の言葉の使用が多くなったし、またそれが新鮮に感じられる。

「季節感がうすれる」という言葉の中にはどうも季節を量的にとらえている感じがある。逆に「季節感あふれる」という言い方もある。ならば、季節感という、一見感覚的ではあるが、自然環境の認識の一つとしてある季節感を自然科学的に測れないものだろうか。それができれば季節感も「信州の自然環境モニタリング」の重要な一項目となり得よう。

季節という言葉は一般的すぎるので、その自然科学的な内容について整理しておこう。季節は、地球と太陽の位置関係という天文上の現象によってひきおこされる。自転と公転によって1年(約)365日が作られ、春分、夏至、秋分、冬至の4特異点で4季に区分される(現在の暦は春分を基準としている)。これが「天文上の季節」である。これに加えて各地域の緯度や地形等とが相まってそれぞれに特有の天候が生ずる。その周期的な推移が各地域ごとに特有な「気候上の季節」である。日本での季節は、春、梅雨、夏、秋霖、秋、冬の6期に区分される。こうした天文、気候上の季節に対応して生き物は各種類ごとに独自の生活様式、独自の季節、「生物季節」をつくる。生物季節は種類ごとに異なるが、それらが群集として共に生活している森なり湖なりの生態系もそれらの季節の集合として独自の季節をつくりだす。いわば

「景観上の季節」である。

こうした天文、気候、生物、景観における多様な季節を認識することによって人は時期ごとの季節感を得るのである。それを測るとなると、気温や降水、日々の天気など、いわゆる天候が非生物的要因としては重要である。ただ、それらは日々の値そのものが問題なのではなく、暖かい日が続くとか、急に冷えてむとくかといった前歴効果の方が季節感のうえには重要なように思われる。生物季節の上でも同じであり、ツバメの飛行が初夏を想わせるのではなく、ある日ふっとあらわれる、そのあり様が季節を感じさせるのである。つまりは変化である。生活相の変化をとらえているのである。落葉樹が日々芽をふくらませて緑葉を広げてゆく、その変化が季節の進行を感じさせ、季節感を生むのである。季節を測るとはこうした環境の変化、つまり日々の差を測り認識することに他ならない。

このような季節感が構成されるプロセスがわかれば、このように計測する手段も原理的には可能となろう。現在でも天候上の季節変化は気象情報として十分利用可能である。問題は実際の季節感を感じさせる生物や景観の変化をどう計測するかである。季節を最も感じさせる生物、景観季節は居住地のまわりのいわゆるみどりの状態であろう。春の芽ぶき、秋の紅葉、そして冬の裸木ほど季節を確実にかつ印象深く感じさせるものはないであろう。しかも、そこに住む動物達の季節を調整するものとなっている。その点ではスギの造林地のように通年の変化の少ないみどりで得られる季節感もまた少ないものとなるだろう。こうした植物、特に景観を構成する主要な高木の緑の量の変化を測ることは現在のマイコンによる画像処理技術を応用すればかなり正確に、かつ定量的になし得よう。この緑の量の変化と合わせ、夏鳥の渡来とか、虫達の出現とかの個別の生物季節を多数項目としてあげ、数量的にチェックできればかなり明確に季節感それ自体を指標化し得えよう。五月蟬と書いてうさいと読ませるのも、このころのハエは出現したばかりであまり人がおっても逃げないのでよけいにしつこい感じ

* 信州大学教育学部 志賀自然教育研究施設
Inst. of Nature Educ., Shiga Heights, Shinshu Univ.

がするという、実に鋭い昔の人の季節感のとらえ方だと思わせる。

こうした生物や景観上の季節的指標を何年間か資料として積みあげれば、気団の変化なみには客観的な季節感の進行ダイヤグラムも作製できよう。

年々失われゆく自然そのものと同調してうすれゆく人間と自然との関係にあって、自然から得られる季節感こ

そは細々ではあれ、今だ万人共通の自然へのきずなの一本にはちがいなかり。それをより意識的に、かつ強めてゆく事は人間の自然環境への着実なみなおしにつながり、かつ良好な関係回復への道ともなるであろう。そうした上で、季節感というものを測り、提示してみるのも効果的なことではないだろうか。